「九州ドイツ文学」第11号別冊
平成九年十一月二十五日発行

韻文『不死身のザイフリート』

石川栄作訳

韻文『不死身のザイフリート』

石川栄作訳

ここに見られるのは、不死身のザイフリート
についてのすばらしい歌で、
ヒルテブラントの調べで書かれたもの。
このようなものを私はほかに聞いたことがない。
この歌をきちんとお読みくだされば、
私の申すことがお分かりいただけよう。

冒頭部分（一―一五詩節）

一

ニーデルラントに名高い国王が君臨していた。
強大な権力を誇り、名をジグムントといった。
国王と妃の間には息子が一人いて、ザイフリートといった。
この人物についてこの歌の中でお聞かせいたそう。

二

この少年はとても腕白で、そのうえ強くて大きくもあったので、
父と母はそのことで非常に心を痛めていた。
彼はどんな人にも断固として従わなかったのである。
彼は勇敢にもそこから旅に出たいと思っていた。

三

そこで国王の顧問官たちが言った。「とどまりたくないのなら、
彼に旅立ちを許しなさい。それが最上の考えです。
何かをさせるのです。そうすれば彼はおとなしくなるでしょう。
何年かしたら、彼は大変勇敢な英雄となりましょう」

四

こうしてその若き勇敢な男はそこを去って行った。
ある森の前に村があり、彼はそれに向かって駆け出した。
彼はある鍛冶屋にやって来て、鍛冶屋に仕えようと思い、
他の徒弟のように、鉄を打ちのめそうとした。

五

その鉄を彼は真っ二つに切り裂き、金敷を地面にめり込ませた。

そのことで咎められても、彼は教えを受け取らなかった。
彼は徒弟と親方を打ちのめし、繰り返し彼らを打ちまくった。
そこで親方は、どうしたら彼から逃れられるかと、度々考えた。

六

ある菩提樹のそばにいつも恐ろしい竜が棲んでいた。
そこへ親方は彼を送り、仕事をして来るように言いつけた。
森の中には、その菩提樹のうしろに一人の炭焼きがいて、
彼を待ち受け、炭を渡してくれるというのである。

七

それでもって鍛冶屋は、竜が少年を片づけてくれるものと思った。
ところが少年は菩提樹のところに着くと、竜を襲った。
若い勇敢な男はすぐに竜を打ち殺したのである。
そこで少年は炭焼き人のことを思い出して、森へ入って行った。

八

彼が森の中へ入って行くと、その山間（やまあい）の谷間には、
彼がこれまでまだ見たこともないような、
悪竜やガマや毒蛇といった多くの怪獣が棲んでいた。
そこで彼は木々を、至るところで引き抜いては、寄せ集めた。

九

木々を怪獣どもに投げつけると、どれも逃げ出すことはできず、
そこにいたすべての怪獣はことごとく足留めされてしまった。
それから彼は炭焼きのところに出かけて、火を見つけると、
薪に火をつけて、怪獣どもを焼いてしまった。

一〇

怪獣どもの角質は柔らかくなって、小川となって流れ出た。
これにザイフリートは大変驚いて、一本の指をその中に浸した。
その指が冷えると、それは角質となっていた。
この小川のように流れ出た角質を身体に塗りつけると、

一一

彼は全身角質となったが、両肩の間だけはそうならなかった。
まさにこの箇所のせいで彼は命を失うことになるが、
このことについてはほかの所でのちにお聞かせいたそう。
彼はギービッヒ王宮へ行ったが、勇敢な心にも満ち溢れていた。

一二

彼はその娘を得るため、国王に喜んで仕えたところ、
ギービッヒ王は彼に娘を妻として与えた。
彼は妻と八年暮らした。彼女が彼のものとなるまでに、
何が起きたか、彼がどんな冒険をしたかを、お聞きくだされ。※

一三

さて、お聞きになりたいだろう。どんな国王にも入手できぬ程の
沢山のニープリングの財宝が、どのようにして発見されたかを。
それは勇敢なザイフリートが岩壁のところで見つけたが、
ニープリングという侏儒（こびと）が隠していたものである。

一四

侏儒ニープリングが山中で死に襲われたとき、
若い三人息子が跡を継いだが、彼らにも財宝は気に入っていた。
彼らは山中で暮らし、ニープリングの財宝を護った。

そのためフン族によって悲惨な殺戮が起こったのである。

一五

お聞きになっているように、勇猛果敢な多くの英雄が
激しい戦いにおいて打ち殺された。
お知らせしておくが、ディエテリーヒ・フォン・ベルネと
師匠ヒルテブラント以外は誰も逃れられなかったのである。

主要部分（一六―一七二詩節）

一六

ライン河のほとりにヴルムスと呼ばれた町があった。
そこを支配していたのはギービッヒという名の国王である。
国王は妃との間に気高い三人の息子と一人の娘を儲けたが、
この娘のためには多くの勇敢な英雄の命が失われたのである。

一七

その三人の若者は、言葉に表わせないほど、王者にふさわしく、
彼らの妹も美しかった。その妹がある昼のこと、
窓辺に立っていた。するとそこへ狂暴な竜が
空を飛んで来て、美しい乙女を連れ去った。

一八

城は燃えているかのように明るくなり、
怪獣はたちまち乙女をつかまえて飛び立ち、
空高く、雲のかなたへ飛び去った。
父と母が悲しみながら立っているのが眺められた。

一九

竜は乙女を山中の岩山へ連れ去ったが、その岩山は
山の上に四分の一マイルの影を投げかけるほど高かった。
乙女はその美しさのゆえに竜に大変気に入られ、
食べ物と飲み物では何も不足するものはなかった。

二〇

竜は乙女を岩山で四年目に至るまで養った。
彼女は誰にも会えなかったが、それは本当だと信じてほしい。
彼女は十二週間あるいはそれ以上、まったく独りきりで、
毎日泣いていた。惨めな生活が彼女にはつらかった。

二一

竜は自分の頭を乙女の膝の上に置いた。
さらにそのうえ竜の力は測り知れないほど大きかったので、
息を吐き出したり、あるいは吸い取ったりするたびに、
竜の下の岩山は大きく揺れ動くほどであった。

二二

ある復活祭の日に竜は一人の人間に変身した。
そこで清らかな彼女は言った。「あなたは私の父と
母に対して何とひどい仕打ちをしたことでしょう。
貴い王妃である母は悲しみ、嘆いていることでしょう。

二三

ああ悲しや、あなた。私が父や母、
それに敬愛する兄弟たちに会えなくなってから、

もう何日も経ちました。私が皆に会いたいのは
当然です。そうしてくだされば感謝いたします。

二四

あなたが私を故郷の家へ連れて行ってくれたら、
私はこの首を担保にかけて、再びこの岩山に戻って来ます。
気高いお方、貴い神のために私を守ってください。
そうすれば私はいつまでも喜んであなたの命令に従います」

二五

そこで怪獣は美しい乙女に向かって言った。
「お前はお父さんとお母さんには決して会えないし、
ほかの誰にも決して会えない。
身と魂をもってお前は地獄へ行かなければならないのだ。

二六

美しい乙女よ、わしのことで恥ずかしく思うことはない。
わしはお前の身体と生命を奪うようなことはしないし、
今日から五年経てば、わしは一人の人間になるのだ。
そしたら、美しい乙女よ、わしはお前を妻にしてやろう。

二七

だからお前は五年と一日、待たなければならない。
わしが人間になり次第、お前はわしの妻となるのだ。
お前の身体と魂は地獄の底へ行かなければならないが、
お前は国王の娘となるのだ。そのことを知らせておこう。

二八

わしがここで今言っていることは、結局、本当のことだ。
地獄の一日はまる一年の長さだ。
だからお前は世界の終わりの日まで居なければならない。
神があわれんでも、どうしようもないことだ」

二九

「聞くところによると、権勢高きイエス・キリスト様、
あなたは天上と地上に存在するすべてのもの、
ありとあらゆるものに勝るお力を持っていらっしゃいます。
あなたの口から出る言葉は地獄をも破壊させるほど。

三〇

ああ、清らかなマリア様、天上の女王様よ、
あわれな乙女の私はあなたの恵みを感じ取ります。
徳高き女性よ、書物があなたについて語っています。
あなたを信じますから、私をこの岩山からお助けください。

三一

私の兄弟たちがこの岩山の洞穴に私がいることを知れば、
生命を賭けて、彼らは私を家に連れ戻してくださるでしょう。
父も知れば、皆は私をこの苦境から救出してくださるでしょう」
彼女は毎日、目から血のように赤い涙を流した。

三二

国王は、誰か知らぬかと、自分の美しい娘を捜すために、
遠くありとあらゆる国へ使者を派遣した。
広いすべての世界のことで、それは大変な苦労であったが、
ついに彼女を岩山からある勇敢な勇士が救い出すのである。

三三

その当時、一人の堂々とした若者がいた。
彼はザイフリートと呼ばれ、ある裕福な国王の息子であった。
彼はものすごい力を持っていたので、獅子をつかまえては、
それらを高い木に吊り上げて、おもしろがっていた。

三四

そのザイフリートが大人に成長したとき、
堂々とした勇士の彼は、ある朝狩りをしようと思い、
オオタカと猟犬を連れて森へ出かけた。
彼は猛々しい動物たちのために森の道を切り開いてやった。

三五

すると猟犬のうちの一匹が彼に先んじて森の中へ入った。
大変勇敢な男ザイフリートがすぐそのあとをつけて行くと、
奇妙な足跡を見つけた。それは竜が気高い乙女を連れ去った
足跡だった。そこへほかの猟犬たちもやって来た。

三六

ザイフリートは食べることも飲むことも、
休むこともしないで、四日目までその足跡を辿って行き、
ついに四日目の朝には高い山を越えた。
ザイフリートは苦労をいとわず、跡を追いかけた。

三七

彼はこの陰気な森の中で新たに道に迷った。
あらゆる道と坂道が分かれていたのである。
彼は言った。「ああ、キリストよ、なぜ私はここへ来たのか？」
彼はまだ国王の娘を慰める術（すべ）を知ってはいなかった。

三八

ところで、ザイフリートは若い頃に勇敢に戦ったことがあり、
五千人の侏儒（こびと）たちが彼に喜んで仕えていた。※
侏儒たちは気高い英雄に進んで自分たちの財産を与えた。
彼は身の毛もよだつ恐ろしい竜を打ち殺していたのである。

三九

そのような愛すべきザイフリートが竜の岩山へやって来た。
彼は今までそれと同じようなものを見たことがなかったほどで、
馬も人も両方ともくたくたに疲れていた。
勇敢な勇士はその岩山の前で馬から飛び降りた。

四〇

英雄ザイフリートがその竜を見たとき、
勇士は何と言ったか、お聞きになりたいことだろう。
「天上の恵み深き神よ、何が私をここへ導いたのか？
悪魔が私を欺いたが、そのことを誰が語れよう」

四一

ザイフリートの心はただちに暗くなり始めた。
何とすばやく彼は猟犬をすべて腕に抱いたことか！
「天上の神よ」、立派な勇士は言った。
「この陰鬱な森から私はもはや抜け出せないのか」

四二

彼は馬のところへ行き、そこから立ち去ろうとした。
すると陰気な森を彼の方に一人の侏儒が駆けて来るのが見えた。

侏儒はオイグライネ※といい、木炭のように黒い馬に乗り、
黄金をちりばめた絹の衣裳を身につけていた。

四三

お聞きしているように、彼は身体に
黒テンの毛皮をまとい、すばらしい装身具※を着ていた。
それほど裕福な国王はいないほどで、衣裳は大変気に入って、
彼はそれを立派に誇り高く身につけていた。

四四

彼は頭にも立派な王冠を被っており、
それはこの世で同じものは見られないほどのもの。
王冠の中には多くの宝石がちりばめられ、
この世でこれほど美しいものにたとえられるものはなかった。

四五

そこで侏儒オイグライネは、英雄を見ると言った。
侏儒が彼に何と言ったか、今やお聞きになりたいことだろう。
侏儒はその選び抜かれた男を丁重に出迎えて、
言うには、「ねえ、君、どうしてこの森へ来たのかね？」

四六

「神の感謝あれ」、ザイフリートは言った。「小さな男の君よ、
君の美徳と誠実を私に受けさせ給え。
君は私を知っているのだから、私の父は何という名前だろうか、
その名前と私の母の名前をも教えてくれるよう、お願いします」

四七

ところで英雄ザイフリートは、これまでの生涯の間、
父と母についてはまったく何も知らないままであった。
彼は遠く、ある陰気な森の中へ捨てられて、
そこで大人になるまである親方に育てられたのである。※

四八

彼は二十四人分の力を持ち、あらゆる強さを具えた男であった。
その彼に向かって侏儒が言った。「君に教えてあげよう。
君の母はジグリンゲといって、高貴な生まれで、
父はジグムント王といい、二人の間に君は生まれたのだ。

四九

ザイフリート、気高い男よ、君はここから立ち去るがよい。
すぐにそうしないなら、君は命を失わねばなるまい。
ここの前方にある岩の上には竜が棲んでいるのだ。
君がここにいると竜に分かれば、君は命を失うことになろう。

五〇

この岩の上にはきわめて美しい乙女が暮らしている。
それをしかと知っておくがよい。そしてここで君に言っておくが、
彼女はキリスト教徒で、ある国王の立派な姫なのだが、
神のあわれみがなければ、彼女は決して救出されないのだ。

五一

彼女の父はギービッヒといい、ライン河畔に君臨している。
姫の名はクリームヒルトで、彼の娘なのだ」
すると英雄ザイフリートは言った。「彼女ならよく知っている。
私たちは彼女の父の国で互いに仲がよかったのだ※」

五二

勇敢なザイフリートはその話をしかと聞くと、
自分の剣を地面に突き刺して、岩のところへ行った。
そのうえで彼、選び出された男は三つの誓いを立てて、
その乙女を手に入れるまではここを去りはしないことを誓った。

五三

そこで侏儒オイゲルは言った。「勇敢な男ザイフリートよ、
君がそのようなことをここでいたずらに引き受け、
三つの誓いを誓い、乙女を助け出したいのなら、
すぐにこの陰気な森から立ち去る許しを私に与えてくれ。

五四

たとえ君が世界の半分を征服し、
七十二ヶ国の言葉を話すことができ、
キリスト教徒も異教徒も君に仕えるとしても、
その美しい乙女はこの高い岩山に残しておかねばならないのだ」

五五

するとすばしこいザイフリートは言った。「否、小人の君よ、
君の美徳と誠実を私に示して、
ここで美しい乙女を救出するのを手伝ってくれ。
さもなければ君の頭を王冠もろとも斬り落としてしまうぞ」

五六

「ここで私がその美しい乙女のために命を失うなら、
私の誠実は徒(あだ)となる。私の命にかけて誓っておくが、
すべてのことを為しうる神を除いては、
誰も彼女を助けることは叶わぬ。それをしかと言っておこう」

五七

そこで英雄ザイフリートは大変怒った。
堂々たる立派な勇士である彼は侏儒の髪をつかみ、
侏儒を力いっぱい岩壁に投げつけると、
侏儒の立派な王冠は粉々に壊れてしまった。

五八

彼は言った。「美徳にあふれた男よ、怒りを鎮めてくれ！
私は、気高きザイフリートよ、できる限りの助言をいたそう。
心からの誠実をもって君に道を教えることにしよう」
「何たることだ！なぜもっと早くそれを言わなかったのか？」

五九

彼は言った。「ここにはクペラーンという巨人が君臨していて、
彼にはこの広野で千人の巨人が従っている。
その巨人が岩壁を開ける鍵を持っているのだ」
「教えろ！」ザイフリートは言った。「乙女の手助けとなろう。

六〇

それをここで教えてくれるなら、お前の命は助けてやろう」
気高い侏儒は言った。「その女性のためにはただちに、
見たこともないような男と戦わねばならないのですぞ」
ザイフリートは言った。「それを聞いて私はうれしいくらいだ」

六一

そこで彼はザイフリートに、前方の山の
岩壁への道を教えると、そこには巨人の家があった。

ザイフリートは巨人の家に向かって叫んで、
巨人におとなしく出て来るよう命じた。

六二

すると怪物は岩壁の前に飛び出して来た。
片手には彼は一つの鋼鉄の棒を持っていた。
「若い少年よ、お前はどうしてここへやって来たのか？
ただちにこの森の中でお前は最期を迎えることになるぞ！

六三

しかと言っておくが、お前は命を失うことになるだろう」
すると英雄ザイフリートは言った。「神が助けてくれよう。
神がその強さとその力をも私に貸してくださるので、
お前はその高貴な生まれの乙女を私に渡さざるをえないだろう。

六四

私たちはいっそうお前に死を呼びかけるが、
それもお前が乙女を惨めにもそこに閉じ込めたからだ。
乙女はこの岩の洞穴の中で大変な難儀を強いられて、
四年以上もの間、ひどい苦しみにあっているのだ」

六五

すると怪物はひどく気分を害し、
憎しみをあらわにして英雄に向かって丈夫な鉄棒を振り上げた。
この鉄棒の長さについては、その半分以上も
木々の上に突き出るのが眺められるほどであった。

六六

こうして巨人クペラーンは数多くの打撃を加えたところ、
鉄棒は一クラフターも地面の下に入ってしまうほどであった。
ザイフリートに向かってすばやく、力強い一撃を与えると、
ザイフリートは英雄らしく五クラフターも飛び退いた。

六七

そして高貴な男は五クラフター、また元の場所に飛び戻った。
そこで巨人は身をかがめ、鉄棒を地面から引き抜いた。
ザイフリートは彼に傷を多く負わせたので、血が流れたが、
その傷ほど深いものはこの世で決してなかったほどであった。

六八

怪物は飛び起き、鋼鉄の棒を振り上げて
ザイフリートめがけて襲いかかって、脅して言うには、
「お前はたちまち命を失ってしまうだろう！」
ザイフリートが彼に言った。「うそつき、そうなるものか！」

六九

こうして怪物は傷の痛みを感じ取ると、
鉄棒を落としてしまい、岩壁の中に逃げ込んだ。
ザイフリートは彼に死の苦しみを加えるところであったが、
彼は捕らえられている乙女のことを考えた。

七〇

巨人は傷の手当てをして、大変立派な鎧兜で
すぐに武装した。それは純金でできていて、
竜の血を浴びて、まったく丈夫なものであった。
オトニート王の鎧兜以外にはこれほど立派なものはなかった。

七一

巨人は腰にとても立派な剣を帯びていたが、
その長さと丈夫さは彼の手に合わせて作られており、
刃は鋭く、そのためには一国をも差し出すほどの品であった。
彼が戦いでそれを引き抜けば、どんな男も生かしはしなかった。

七二

彼は頭には鋼鉄の丈夫な兜を被っていたが、
それは、太陽が海の波に照らしつけるように、輝いていた。
彼は納屋の戸のような広い楯を手に取った。
それは一シューの厚さであったが、本当だと信じてほしい。

七三

怪物は岩壁の上から飛び下りた。
手にはもう一つの鋼鉄の棒を持っていたが、
それは四方の角が、どんなカミソリよりも鋭くて、
塔の屋根にある鐘のように明るく鳴り響きもした。

七四

そこで怪物は言った。「おい、小さい男よ、
悪魔がお前を連れて来たのだな。俺自身の家の中で
俺を殺そうなんて、俺がお前に何をしたというのだ?」
「いや」、ザイフリートは言った。「出て来いと命じただけだ!」

七五

そこで強い巨人は言った。「お前は呪われろ!
お前が俺を捜し出したことに対して、仕返しをしてやろう。
それを避けられたら、お前はたいしたものだ。
さあ、傲慢ゆえにお前は吊るされるのを学ぶのがよかろう」

七六

「それは神が許しはしないだろう、美徳に欠けた悪党め。
私は実際のところ縛り首のためにここへ来たのではない。
乙女を岩山から救い出すのをここで手伝わなかったら、
しかと言っておくが、お前の命はなくなるぞ」

七七

すると怪物は言った。「お前にここで言っておくが、
俺は乙女を連れ出す手助けなど決してしない。
俺はその邪魔をしてやる。お前は俺の勇気を知らないな。
お前がどんな立派な乙女ももはや望まないようにしてやる!

七八

今日も、またこれから先もずうっと拒んでやる!」
するとザイフリートは言った。「今朝から覚悟はできている!」
そこで彼ら、二人の勇敢な男たちは、
陰鬱な森の中でものすごい打撃を加えながら、ぶつかり合った。

七九

両者の強い力のために戦いは激しくなり、
兜の上で荒々しい火花が飛び散るのが眺められた。
巨人が持っている楯がどんなに立派であろうとも、
ザイフリートはそれをただちに粉々に打ち砕いた。

八〇

さらに彼は巨人に長い間攻撃を続けて、
立派な鋼鉄の鎧兜を身体から切り落とした。

巨人クペラーンは血まみれになって立っていた。
彼は十六ヶ所に深い傷をザイフリートに負わされていたのだ。

八一

巨人クペラーンは苦境に晒されて大きな声で叫んだ。
「気高い勇士よ、俺に恵みをかけてくれ！
お前は身体全体でまったく勇敢に戦った。
お前こそ名誉にあふれた、選び抜かれた勇士だ。

八二

お前はここでただ一人きりであり、小さな男であると
俺には思われたが、俺はお前に勝つことができなかった。
俺を生かしてくれ。そうすれば俺はお前に
鎧と剣、そして俺自身をも差し出すことにしよう！」

八三

「喜んでそうしよう」と、優れた男ザイフリートは言った。
「愛らしい乙女を岩山から救い出す手助けをしてくれたらだが」
「では俺はお前にここで誠実を誓おう。疑わないでくれ。
俺が美しい乙女を岩山から救い出してみせよう」

八四

そこで見知らぬ者同志の彼らは一緒に二つの誓いを誓った。
立派な勇士ザイフリートは相手の確約を得た。
それにも拘らず不実な男はザイフリートに対して誓いを破り、
そのためのちにいささか痛い最期を迎えたのである。

八五

そこで英雄ザイフリート、気高い騎士は言った。
「ああ、親愛なる仲間よ、お前の傷が嘆かわしい」
こうして彼は自分の身体から立派な絹の衣服を引き裂き、
それでもって不誠実な男の傷を自ら手当てしてやった。

八六

すると不誠実な男は言った。「ねえ、親愛なる仲間よ、
あそこに岩壁がある。美徳にあふれた男よ、
どこに扉があるか、我々は調べなくてはならない。
二人で次々に調べれば、事はすでに成就されたも同然だ」

八七

彼らは一緒に小川の堤の前に行った。
するとたちまち不実な男は手に剣を取った。
そして英雄ザイフリートが先に森の中へ入って行くと、
すぐさま不実な男はザイフリートに飛びかかった。

八八

彼は英雄ザイフリートに激しい一撃を加えたので、
気高い騎士は自分の楯の下に横たわった。
あたかも彼は死んだかのような状態で、
鼻と口からは真っ赤な血が流れ出た。

八九

今や英雄ザイフリートは幅広の楯の下に横たわっていたが、
そこですぐに手助けをしてくれたのが侏儒オイゲルであった。
侏儒は霧の頭巾を取り出して、それを男の上に投げかけた。
巨人は敵意を抱いていたが、相手を見失う羽目となった。

九〇

巨人は木のところに走り寄り、気高い男を探した。
「悪魔がお前を連れ去ったのか、それとも神がそうしたのか？
お前には奇蹟が起こったのか？お前は最初ここにいて、
伸びて倒れていたのに、俺はお前を見失ってしまうとは！」

九一

この言葉に侏儒は笑みを浮かべ、喜んだ。
侏儒はザイフリートのところへ行き、彼を草原にすわらせた。
そこで彼、選び抜かれた男がしばらくすわっていると、
ついに勇敢な勇士は少しずつわれに返った。

九二

こうして英雄ザイフリートが再び正気に戻ると、
自分のそばに侏儒がすわって喜んでいるのを見た。
ザイフリートは言った。「神に報われますよう！奇蹟の侏儒よ。
君は私によくしてくれた。ほかにはお礼の言葉もない」

九三

侏儒オイゲルは言った。「そう言うのも当然でしょう。
私が来なければ、もっと悪いことが起こっていたでしょうから。
ここで私の教えに従い、乙女のことはもう考えないでください。
巨人に気づかれずに、頭巾を被ってここから立ち去りなさい」

九四

英雄ザイフリートは言った。「とんでもありません。
私の誠実を知っていてほしいが、私に千の命があったとしたら、
私は美しい乙女のためにそれらすべての命を賭けるつもりです。
私に何が起ころうと、私はそれをなお一層試みるつもりです！」

九五

何と勇敢に彼は頭巾を自分の身体から脱ぎ捨てたことか！
両手で剣を振り上げ、乱暴な男に向かって
八ヶ所も深い傷を負わせた。大声で彼は乙女に叫んで、
強い巨人クペラーンを大方打ち倒したことを知らせた。

九六

「お前は身体からすべての勇気をふりしぼって戦った。
今や俺はお前と仲直りしたい、不屈の勇士よ。
もしお前が俺を殺したりすれば、選び抜かれた男よ、
乙女のところへ連れて行く者はこの世で誰もいなくなるぞ」

九七

それゆえ英雄ザイフリートは、自分を乙女のところへと
導いた大きな愛についてあれこれと考え、
不実な男を生かしたままにせざるをえなかった。
彼は言った。「さあ、道を歩め！私の前を歩むのだ。

九八

そして気高い乙女のところへすぐに私を案内するのだ。
でなければ、世が終わろうとも、お前の首を刎ねてしまうぞ！」
そこで不実な男は、若き騎士の英雄ザイフリートが
命じた通りのことを果たさざるをえなかった。

九九

彼ら二人は一緒に竜の岩山の前に出かけた。
すばやく不実な男は鍵を手に取った。

岩山は開かれ、地下の扉が開け放たれた。
この扉は地下八クラフターのところに隠されていたのだ。

一〇〇

岩山が開けられ、地下の扉が開け放たれたとき、
英雄ザイフリートはすばやく鍵を奪い取った。
彼はすぐさま錠前から鍵を引きちぎったのである。
彼は言った。「さあ、道を歩め。私の前を歩くのだ」

一〇一

二人は岩山を登って行くと、くたくたになるほどであった。
英雄ザイフリートが清らかな乙女を見つけると、
私たちも聞いているように、彼女はひどく泣いて、言った。
「私はあなたに父の館でお会いしたことがあるわ※」

一〇二

こうして乙女は言った。「ようこそ、ザイフリート様！
私の父母はライン河畔のヴルムスでいかに暮らしていますか。
そして親愛なる兄弟たち、天晴な三人の国王はいかがですか？
誠実にそれを話してください。私にそれを聞かせてください」

一〇三

英雄ザイフリートは言った。「黙って！泣くのはやめなさい！
美しい清らかな乙女よ、私と一緒にここから出ましょう。
私があなたをすぐにこの大きな苦境から助けてあげますから。
さもなくば、私はそのためにここで死ぬ覚悟です」

一〇四

「立派な騎士のザイフリート様、神の報いがありますよう！
でもあなたが竜に太刀打ちできないのではないかと心配です。
竜は恐ろしい悪魔で、私も今までに見たことがないくらいです。
あなたも竜を見たら、それが本当だと分かりますわ」

一〇五

英雄ザイフリートは言った。「竜は恐ろしくありません。
私はこれまでの苦労を無駄にしたくはありません。
私は乱暴な男を相手に力いっぱい戦ってきました。
竜が悪魔であろうと、私は竜に打ち勝ってみせます」

一〇六

「あなたに神の報いがありますよう、ザイフリート様。
あなたは私のために大変な苦労をし、苦しみをなめました。
しかとご承知おきください。神の助けで故郷へ帰れたら、
誰にも差し上げない真心を私はあなたに差し上げます」

一〇七

さて、強い巨人クペラーンはさらに岩山を進んだ。
彼は言った。「ここに立派な剣が隠されている。
それでもって気高い騎士は竜に打ち勝つことができる。
それ以外に竜を打ち負かす剣はこの世にないのだ」

一〇八

彼がその剣について語ったことは、真実のことであった。
彼はその不実な男を警戒しなかったので、
強い巨人は気高い騎士に傷を負わせた。
そのため彼は片足で竜の岩山に立つのは叶わぬほどであった。

一〇九

そこで彼は巨人に組みつき、激しい格闘が始まった。
そのため竜の岩は揺れ動いた。乙女の恐怖は大きかった。
彼女は泣き、手をもんだ。純粋で優しい姫は言った。
「ああ、天の神よ、今日は正義の人に味方してください！

一一〇

あなたが私のために命を失うことにでもなれば、
私は心に痛々しい苦しみを抱かずにはいられないでしょう。
それならば私は、この洞穴の岩山の上で
この大きな苦しみで倒れて、死んでしまいたいわ。

一一一

ですから、勇士ザイフリート様、あなたの身体をお守りください。
そしてあなたの苦労とあわれな女の私のことを考えてください！」
すると英雄ザイフリートは言った。「立派で美しい乙女よ、
私はしかと自分の身を守りますから、もう心配しないでください」

一一二

彼らは互いに格闘し、そのさまを美しい女性が見ていた。
そこで不実な男は命を失わねばならなくなった。
ザイフリートはその乱暴な男の傷をつかんで、
バラバラに引き裂いた。その男はもう立ってはいられなかった。

一一三

巨人は草原の上でザイフリートにひざまずいた。
「美徳にあふれた男よ、俺を生かしておいてくれ！
不屈の騎士よ、心からお願いする。
俺は三度不実を働いたが、それを神が嘆きますよう」

一一四

英雄ザイフリートは言った。「いくら言ってももう駄目だ。
私がこの目で気高い乙女を見たからには」
彼は巨人の腕をつかんで、彼を岩山から投げ落とした。
巨人は粉々になった。そこで美しい乙女はほほえんだ。

一一五

今や英雄ザイフリートは岩山の頂上に行き、
礼儀正しく美しい乙女の前に歩み寄った。
「すべての女性にもまして美しい姫よ、泣くのはおよし。
私は今、気高い姫よ、あなたのためにやって来たのです。

一一六

すぐにこの大きな苦難からあなたを救ってあげよう。
さもなくば私はあなたのためにここで死ぬしかありません」
「神の報いがありますよう、ザイフリート様、不屈の騎士よ。
私たちに大きな苦難が近づいているのを心から恐れています」

一一七

英雄ザイフリートは言った。「我々に大きな苦難が
近づいているなら、それは本当に心から悲しいことです。
私は四日目に至るまで何も食べず、何も飲まず、
またほとんど休息もしていません」

一一八

そのため立派な侏儒、小さな男オイゲルも、
また気高い乙女もザイフリートの下品な言葉に驚いた。

侏儒はザイフリートに言った。「最もおいしい食べ物を
君ザイフリートのためにここの洞穴の岩山へ運ばせましょう。

一一九

十四日分の食べ物と飲み物を差し上げましょう」
洞穴の山からこちらへ食事が運ばれた。
食卓で多くの立派な侏儒たちが彼に仕えた。
そのうえ乙女もまたザイフリートに対して十分な世話をした。

一二〇

彼らが食べ物を口にしないうちに、物凄い音が聞こえてきた。
あたかも高い山がすべて崩れ落ちるかのようだった。
それゆえ美しい乙女は非常に驚いた。
彼女は言った。「親愛なるお方、もうおしまいかも知れません。

一二一

すべての世界が私たちに味方しようとも、
私たち二人は破滅です。勇敢な人よ、ご承知おきください」
英雄ザイフリートは言った。「善なる神がこの世で私たちに
与えてくれたこの命を、誰が奪い取りましょうか?」

一二二

ザイフリートは絹の衣服を引き裂いて、彼女の汗をぬぐった。
愛らしい乙女は、恐怖のあまり、汗だくだったのである。
ザイフリートは言った。「私がそばにいるから、悲しまないで」
食卓で仕えていた侏儒たちは、逃げ去ってしまった。

一二三

二人の恋人がそのような話をしていると、
竜が三マイルほど遠くからこちらへ飛んで来た。
竜は口から火炎を吐き出しているのが見られたが、
その燃えている炎は長さが槍三本分もあるほどであった。

一二四

つまり、竜は呪われて魔性的な存在となっていた。※
竜は常に悪魔にとりつかれていて、
火を吐く竜の姿に変えられていたが、しかし魂と理性と感覚は
損なわれることはなく、そのままだった。

一二五

竜は、人間となるまで、すなわち、以前より望んできた
美しい若者となるまでの五年間と一日の間、
人間の本性に従って理性を必要としたのである。
竜の姿は色事のためで、ある女性が竜を呪っていたのである。

一二六

竜は乙女の美しい身体を人間らしく護った。
五年が過ぎ去ったら、乙女を妻にしようと思ったからである。
彼は竜の姿となっている間、彼女の世話をし、
その後彼女に求婚しようと思ったのだが、それは実現しなかった。

一二七

自分が長いこと養った乙女を、今やザイフリートが
ヴルムスへ連れて行こうとしたので、
竜はひどく怒って岩山に戻って来たのである。
竜は熱でもって、岩山の上にあったものを焼き尽くそうとした。

一二八

今や乙女は心配になり、ザイフリートに忠告したので、
二人は竜が飛んで来てはねとばされることのないように、
洞穴の中に身を潜めることによって、
――そう、洞穴は山中の竜の岩の下にずっと続いていたのだ――

一二九

竜とその熱から命を守ることにした。
すると竜は悪魔の本性をあらわして、
火を吐きながら岩山に飛んで来た。岩山は大きく揺れ、
世界が存在する限り、それほどかき乱されたことはなかった。

一三〇

今やザイフリートは竜の剣を手に取った。
それはクペラーンが彼にありかを教えていた剣であり、
竜の岩山でザイフリートが身をかがめて、岩壁の端にある
その剣を手に取ろうとすると、背後から襲われたのであった。

一三一

さて、ザイフリートはこの剣を持って洞穴から飛び出して来た。
物凄い怒りに満ちた一撃で彼は竜をねらった。
竜はその鱗でザイフリートの楯を引き裂いたので、
大きな不安のあまり彼は熱い汗を流したほどであった。

一三二

岩山は火炎のように、何にも増して熱くなり、
赤熱の鉄を煙突から出すかのように、
恐ろしい竜は熱をこの上なく熱くして、
絶えずザイフリートに向かって地獄のような火を吐き出した。

一三三

こうして狂暴な怪獣が岩山と洞穴のある山に
襲いかかったので、多くの野性の侏儒たちが
森の方に飛び出して来た。山が崩れ落ちて、
死ぬのではないかと、彼らは恐れたからである。

一三四

つまり、ニープリングの息子二人が山中に住んでいたのである。
彼らはオイゲルの兄弟で、父ニープリングの財宝を
しっかりと護っていたが、今や山が揺れ始めると、
二人の王子は財宝を外へと運び出し、

一三五

竜の岩山の下にある洞穴の岩壁に運んで隠しておいたところ、
のちにそれをザイフリートが見つけるのである。
侏儒オイゲルについてはあとでお聞かせするように、
彼は兄弟たちが山を抜け出して、山はからっぽになったことも、

一三六

また彼らが財宝を隠しておいたことも知らなかった。
それは怪獣を恐れて隠されていたのだが。
というのも、彼らは皆、竜がザイフリートを苦境に追い込み、
そのあとで侏儒をも皆殺しにしてしまうと恐れたからである。

一三七

なにしろ竜は侏儒たちの所為(せい)で乙女を失うのだから無理もない。
竜は道や岩山の扉のこともよく知っていたし、

竜が涼もうとするときは、廊下に横たわり、
乙女が眠っている間も、彼女から離れることはなかった。

一三八

竜が食事を運ぶときは別だが、冬の期間であれ、
彼女は岩山の下でおよそ五十クラフター離れたところにすわり、
竜は穴の前に横たわり、彼女を寒さから守っていたのである。
さて、再び語り始めて、最後までお聞かせいたそう。※

一三九

今や岩山は赤々と輝き、英雄ザイフリートは
竜から受ける熱い炎を避けねばならなかった。
竜は彼に向かって青くて赤い炎を吐き出していたのである。
それゆえザイフリートは困窮し、身を隠さねばならなかった。

一四〇

乙女とザイフリートは山の洞穴の中へ逃げ込んで、
竜の炎が山上で少しばかり弱まるのを待った。
彼はわきの穴蔵に足を踏み入れて、財宝のところにやって来た。
竜がそれをこの場所に集めたものだと彼は考えた。

一四一

財宝は彼にはどうでもよかった。そこで乙女は言った。
「気高いザイフリート様、私たちに大きな災いが近づいています。
竜は六十匹の小竜を連れて来ましたが、皆、毒を持っています。
岩山の上では竜の方があなたの力に勝っています」

一四二

「聞くところによると」、高貴な生まれのザイフリートが言った。
「神に身を委ねる者は、決して滅びることはありません。
私たち二人とも死なねばならないなら、選び抜かれた乙女よ、
私があなたの世話を引き受けたことを、神に嘆くことにしよう」

一四三

そこで英雄ザイフリートはひどく怒り、覚悟を決めた。
彼は剣をつかんで、岩山に登った。
竜と一緒にやって来た小竜たちは落ちてしまい、
もと来た道を戻って飛んで行った。

一四四

年老いた竜だけがとどまり、ザイフリートを苦しめた。
竜の口からは青色や赤色の炎が出てきた。
竜が頻繁にザイフリートに体当たりしてきたので、彼は倒れた。
彼はこれまでこのようにひどく嘆いたことはなかった。

一四五

竜は悪魔のごとくその尻尾を使って戦い、
英雄ザイフリートに何度も絡みついて、
高い岩山から彼を投げ捨てようと思った。
ザイフリートは絡みつく竜から飛び退き、難を逃れた。

一四六

ザイフリートは怒って竜の角を目がけて打ちのめした。
彼はもはやとどまらずに、竜を前方から攻めた。
彼は角質の頭の側面を目がけて打ちのめしたが、
しかし彼は竜から苦しみをなめなければならなかった。

一四七

彼は柔らかくなった角を立派な剣で打ちのめした。
竜の熱も、まるで一フーデルの石炭で炎がかき起こされ、
突然燃え上がったかのようだったので、
ようやくその角は柔らかくなり、竜から流れ出てきたのである。

一四八

彼は竜を真っ二つに斬り裂くと、
片方を岩山から突き落として、粉々にしてしまった。
それからすぐもう一つの片方を蹴飛ばしてしまった。
そこへ気高い乙女がザイフリートのところに急いでやって来た。

一四九

彼は物凄い熱のあまり倒れ、どこにいるのかも分からず、
異常な失神のあまり、疲れも癒すことはできず、
見ることも聞くこともできず、誰も見分けることができなかった。
彼の顔色は青ざめ、口は石炭のように黒かった。

一五〇

彼は長い間横たわっていたが、再び生気が蘇ってきて、
再びすわることができた。彼は愛しい乙女を探した。
すると彼は彼女がそこに死んだように痛ましく倒れているを見た。
ザイフリートは言った。「天の神よ、私の苦労も水の泡なのか」

一五一

彼は彼女の傍らにすわって、言った。「神もあわれみ給え！
私は死んだあなたを連れ戻すのか！」彼は彼女を腕に抱いた。
そこへ侏儒オイゲルがやって来て、すぐに言った。
「乙女が元気になるよう、彼女に薬草を与えましょう」

一五二

そこで清らかな乙女が薬草を口にすると、
彼女はすぐに起き上がり、正気に戻って、言った。
「気高いザイフリート様、あなたの助けに感謝します！」
彼女は彼をやさしく抱きしめ、彼の口に接吻をした。

一五三

そこで英雄ザイフリートに向かって高貴な侏儒オイゲルが言った。
「邪悪な巨人クペラーンが我々の山を占領してしまい、
その中で千人の侏儒が彼に従わねばならず、
貢物として我々の国をその不実な男に差し出していたのですが、

一五四

今や君が我々を解放し、ここで自由にしてくれました。
それゆえ、我々は生きている限り、君に喜んで仕えましょう。
そして君と立派な乙女の帰国に伴って参りましょう。
私はライン河畔ヴルムスまでの道筋を知っているのです」

一五五

侏儒は彼らを山中の洞穴の家に案内した。
侏儒は彼に喜んで食事とワインをも差し出した。
それは入手できる、あるいは考えられる最上のものであった。
彼らの心が望む以上のものが山中に沢山あったのである。

一五六

ザイフリートは立派な国王オイゲルと、その二人の兄弟に
別れを告げた。彼らもオイゲルと同様に国王であった。

気高い国王たちは言った。「立派な勇士ザイフリート殿、
我々の父ニープリングは苦しみのあまり死んでしまいました。

一五七

巨人クペラーンがここで君に死を与えていたら、
すべての侏儒はこの山で死なねばならなかったでしょう。
だからこそ我々は、乙女がいたあの岩山に行くことのできる
鍵がクペラーンの手にあることを教えたのです。

一五八

今やそれが君の高貴で気高い手によって実現したのです。
名高い高貴な国王よ、我々はそのことでいつまでも感謝します。
我々は君と美しい乙女のお伴をしましょう。
災いが起こらないように、我々千人が君たちに随行いたします」

一五九

英雄ザイフリートは言った。「否、君たちはここに残りなさい」
彼は乙女を背後に乗せ、侏儒たちを家へ帰らせた。
そのあと侏儒王オイゲルだけが彼について来た。
そこでザイフリートが彼に言った。「ところで、立派な勇士よ、

一六〇

天文学と呼ばれる君の技術を私に教えてくれ給え。
あそこの竜の岩山で、今朝、君は星とそのシグナルを
見ていたが、私と私の美しい妻はどうなるのか、
私は妻をどのくらい長くそばにおいていられるのだろうか?」

一六一

すると侏儒オイゲルは言った。「それを言ってあげよう。
私にはよく分かっている。君は奥方と八年しか過ごせないだろう。
君はその後、暗殺によって命を失うのだ。
まったく何の罪もなしに、君の命は失われることになるのだ。

一六二

その後、とても美しい君の奥方が君の暗殺の復讐をするだろう。
そのために多くの英雄たちがその命を失い、
もはやいかなる英雄もこの世に生き残ることはあるまい。
このような妻を持った英雄がこの世でどこにいるであろうか?」

一六三

ザイフリートはすばやく言った。「私がやがて殺され、
そのように復讐がなされるなら、私は誰によって殺されるのか、
尋ねようとは思わない」オイゲルは彼にすぐに加えて言った。
「そうだ、君の美しい奥方もまた戦死を遂げるだろう」

一六四

「さあ、故国へ帰り給え」と、ザイフリートは侏儒に言った。
彼らは別れがつらかった。立派な国王オイゲルは
山へ戻って行った。今やザイフリートは、あそこの岩山に
財宝を残してきたことを思い出した。

一六五

財宝を残したのは、クペラーンであるか、
または竜のどちらかだと、彼は二つの考えを抱いていたが、
それは竜が人間の知恵に従って集めたもので、
竜が人間に戻ったとき、その財宝を所有するのだと思うに至った。

一六六

彼は言った。「私が苦労してあの岩山を征服したのだから、
その中で私が見つけたものは、当然私が継ぐべきものであろう」
彼とその美しい女性は、そこへ駆けつけて財宝を運び出した。
彼は自分の馬に財宝を積んで、それを追い立てて行った。

一六七

ライン河畔にやって来ると、彼は心の中で考えた。
「私が短命であるならば、この財宝は私には何の役に立つのか？
すべての勇士が私のために命を失うのであれば、
財宝は誰のものになるのか？」そして財宝をライン河へ沈めた。

一六八

その遺産が山中の国王たちのものであることを彼は知らなかった。
彼らが年老いた侏儒ニープリングの財宝を隠していたのだが、
その息子である侏儒オイゲルはその事情を知らなかった。
彼は、財宝はまだ山中に埋もれていると思っていたのである。

一六九

今やギービッヒ王のもとに気高い使者が遣わされ、
美しい姫がこちらへ向かっており、
彼女が邪悪な竜から救出されたことが知らされた。
ギービッヒはすぐに貴族や家来を呼び集めた。

一七〇

高貴な勇士ザイフリートは、この世でどんな国王も
これほど称えられたことがないほど、皆に出迎えられた。
国王はすべての国々に召集を呼びかけ、
国王、領主及び騎士たちにその旨が知らされた。

一七一

各人がライン河畔のヴルムスへ
豪華な結婚式のためにやって来た。十五名の領主が入って来て、
領主にふさわしく丁重に出迎えられた。
たちまち喜びに満ち、その国は騎士であふれた。

一七二

今や結婚式が十四日以上も続いた。
人々は馬を駆けさせ、槍試合をしたり、騎士の競技をしたりした。
十六の槍試合が行われた。そのあと馬から降りて、
繋がれた馬には餌が与えられ、人々にも食事が出された。

結末部分（一七三－一七九詩節）

一七三

ザイフリートはこうして国を保護し、法律を強化した。
そのため誰が黄金を所有しても、心配する必要はなかった。
このように大きな力で彼はすべてのことを処理したのである。
「なんてことだ」、ギュンターが言った。「ここでその英雄が、

一七四

勇敢な我らをさしおいて尊敬されているとは。我らは彼と同じ
くらい高貴な生れでありながら、ここで蔑まされているのだ。
彼は毎日兜や鎧を身につけている。

それでもって彼はこの国の英雄たちを見下しているのだ」

一七五

そこで獰猛なハーゲンが言った。「彼は私の義理の弟だ。
彼がこのライン河畔で国を支配するつもりならば、
何も見渡せないように、彼に思い知らせてやろう。
私こそ常に第一人者で、そのようなことには仕返しをしてやろう」

一七六

すると勇士ギールノートが言った。「私の義弟ザイフリートめ、
私は最愛のものを手放しているのだ。
私たちの父ギービッヒがここで私の気持ちを理解してくれるなら、
今後ずっとザイフリートのためにはならないことを言っておこう」

一七七

このように三人の若い国王はザイフリートに対して敵意を抱いた。
彼らは沈黙を守ったが、ついに二人がそれを実行し、
ザイフリートは死ぬこととなった。あそこオッテンの森の、
ある冷たい泉のほとりで、やがて獰猛なハーゲンが

一七八

両肩の間を突き刺したが、そこだけは傷つく箇所だったのである。
それは彼が泉に口と鼻を浸して涼をとっていたときのことだった。
彼らは競走して走って行ったとき、
ハーゲンが命令されていて、ザイフリートを突き刺したのである。

一七九

クリームヒルトの三人兄弟について、さらに聞きたい人は、
それがどこで見つけられるか、ここで私がお教えいたそう。
ザイフリートの結婚を読めば、八年がどのように過ぎたか、
よく分かるでしょう。この話はここで終わることにいたそう。

訳注

詩節

一二　このあと第一六詩節から始まる主要部分に続くものと考えられるが、その前に財宝に関する三詩節（第一三―一五詩節）が挿入されている。

三八　ここで唐突に古い伝承が挿入されたかたちになっているが、この部分は削除されても差し支えないであろう。

四二　第四五詩節では再度オイグライネ（Eugleyne）という名前が用いられているが、それ以外ではすべてオイゲル（Eugel）と呼ばれている。

四三　テクストでは本来「従者」（gesinde）となっているが、脚注を参考にして「装身具」（gesmîde）と訳しておく。

四七　この叙述は第一―一二詩節の内容とは矛盾する。第四六―四八詩節は削除されても差し支えないところであるが、『ティードレクス・サガ』などに見られるような別の古い伝承がここに織り込まれたものと考えられる。

五一　ザイフリートのこの言葉がでたらめでないことは、のちの第一〇一詩節における乙女の言葉からも明らかであるが、それにしても第三四－三五詩節および第三七詩節の叙述を考え合わせると、いくつかの疑問を抱かせる。

一〇一　前注参照。第一二詩節と第三二詩節に関連づけて、ザイフリートは「ギービッヒ王に仕える」使者として「美しい姫を捜しに出かけた一人の優れた勇士」であると考えるべきであろうか。

一二四　第一二四－一二七詩節は竜についての補足説明のために挿入されたものと考えられる。

一三八　第一三三－一三八詩節は補足的に語られたもので、このあとの第一三九詩節は第一三二詩節から続くものであると考えてよいであろう。

あとがき

ここに訳出したのは十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』である。底本には Wolfgang Golther (Hrsg.):Das Lied vom Hürnen Seyfrid nach der Druckredaktion des 16. Jahrhunderts. Zweite Auflage. Halle a. S. Verlag von Max Niemeyer. 1911. を使用した。作品全体は百七十九詩節の韻文で構成され、一詩節は八行から成るが、翻訳にあたっては一詩節四行の体裁をとった。ドイツ語の韻文をそのまま忠実に八行の和文へ翻訳するのは不可能であるという事情と、紙幅の都合によるものである。また二十八ヶ所に挿入されている木版画の説明文の訳出も割愛した。

この十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』は言語・形式的には統一されているものの、内容的には締まりのない編集を示しており、そのため物語全体は冒頭部分（一－一五詩節）、主要部分（一六－一七二詩節）そして結末部分（一七三－一七九詩節）の三つに分けられるのが一般的である。この三つの部分で語られている物語内容は、互いに矛盾を示しているばかりではなく、それぞれの部分における筋の展開にも多くのいわば「裂け目」があり、主人公ザイフリート自身の人物像についてもさまざまな矛盾が見出されることは、訳注でも指摘しておいた通りである。これらの矛盾が何を意味しているかについては、ここで詳しく述べる余裕はないが、拙稿（『不死身のザイフリート』におけるザイフリート像の特質　徳島大学教養部紀要――外国語・外国文学――第四巻一九九三年三月）において論じているので、それを参照されたい。いずれにしても作品全体は「雑多な素材を寄せ集めたつぎはぎ細工」のような印象を与えずにはいない。しかしそれだけにこの韻文『不死身のザイフリート』は、新旧さまざまな伝承素材が作品の至るところに織り込まれているという点で、ジークフリート伝説系譜の研究にとっては貴重な資料であると言えるのである。